

郷土・資料調査室の貴重資料を紹介するコーナー

書庫を繚く

ひもと



① 東都名所 上野東叡山全図



② 第二回内国勸業博覧会

今回は、令和8年度開催予定の企画展「浮世絵でたどる上野公園の歴史—寛永寺と内国勸業博覧会—(仮)」から資料をご紹介します。

寛永寺は江戸幕府の守護として、また、天下万民の平安祈願のために寛永2年(1625)に創建された寺院で、昨年創建400年を迎えた、長い歴史を誇る寺院です。

◆寛永寺の浮世絵 当館は、寛永寺のあちらこちらを描いた浮世絵を多数所蔵しています。その対象は、清水観音堂、摺鉢山、不忍池などなど、寛永寺境内のさまざまな地点にわたり、それぞれのスポットの名所図として描かれています。それに対して、初代歌川広重による「東都名所 上野東叡山全図」(①)は、北から順番に根本中堂、常行堂・法華堂、文殊楼(吉祥閣)など複数の建造物が描かれています。現在の上野公園でいえば、東京国立博物館前の噴水池から上野大仏までの広

範囲に当たります。寛永寺を構成する代表的な建造物群を斜め上から見下ろしたこの俯瞰図は、浮世絵というよりは絵図に近く、中世以来の寺社参詣曼荼羅や縁起絵巻を想起させます。そしてここに描かれている常行堂・法華堂・輪蔵・多宝塔・根本中堂・吉祥閣・大仏殿・番神堂・鐘楼は、すべて慶応4年(1868)の上野戦争により焼失してしまいました。図①は在りし日の寛永寺を描いた図としても、貴重な存在です。

◆博覧会の浮世絵 明治時代になると上野公園は、殖産興業の一環として開催された内国勸業博覧会の会場として選ばれ、その様子が盛んに浮世絵に描かれます。第1回が明治10年(1877)、第2回が明治14年、第3回が明治23年に、いずれも上野公園で開催されました。明治14年、歌川国利の浮世絵「第二回内国勸業博覧会」(②)は、画面の最奥にイギリス人建築家、ジョサイア・コンドルの設計した美術館を、手前

に日本橋の時計商・金田市兵衛の製作した時計台を配し、左右対称のシンメトリーで描かれています。時計台は博覧会で受賞した作品がそのまま屋外で展示され、コンドルの美術館とともに当時の話題をさらいました。浮世絵師は、この2つの建造物を大きく描くため、絵の縦の長さに収まるよう時計台の両脇の木造の建物（第一本館から第四本館）を大きな八の字にデフォルメして描いています。

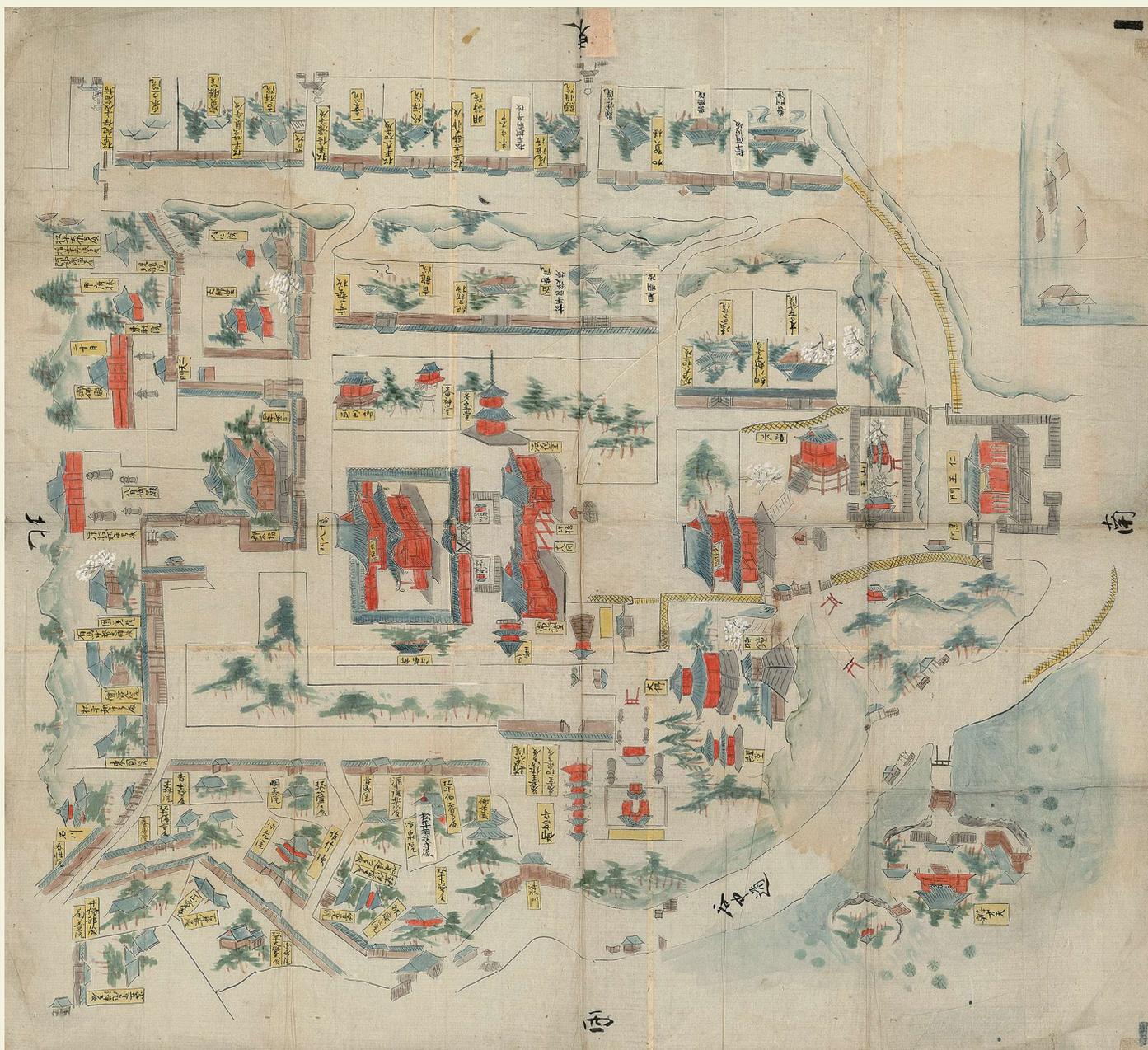
中央に陣取るのは明治時代前期の要職「参議」ら数名と、右大臣・岩倉具視と太政大臣・三条実美です。3月1日の博覧会開場式の様子を描いたと思われ、式典に出席するには礼服を着用することとあらかじめ指示があったため、周囲には黒ずくめのシルクハットの怪しげな人物たちが配され、画面右側には楽隊が連なっています。

このように図②は、明治時代にできたばかりの新しい建造物である美術館・時計台・噴水、そして新しい時代の服装・役職などは詳細に描いています。しかし、博覧会の中門として使用された寛永寺の旧本坊の門については時計台の真裏に隠され、かろうじて屋根の上半分が描かれている

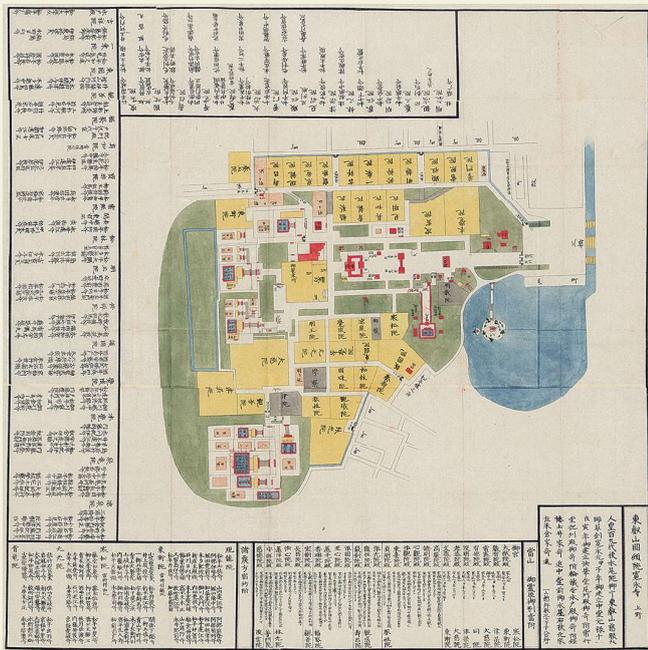
ばかりで、門の存在自体わかりにくくなってしまっています。旧幕府の威光が感じられる寛永寺の遺構は、ほとんど焼野原になってしまったこともあり、明治を象徴する内国博覧会にはふさわしくないと考えたのかもしれませんが。

◆寛永寺の境内絵図 寛永寺境内の主要堂宇は、徳川将軍家の霊廟部分を除けば、尾張屋板切絵図「東都下谷絵図」にも描かれています。ただし切絵図には、①の浮世絵に描かれていても小さな建造物の名前までは記載していません。こうした場合、どのような資料で名前を調べたらいいのでしょうか。その疑問に答えてくれる一つの例が境内絵図です。印刷されていないものが多いため現存は少ないですが、当館では、2点の絵図を所有しています。

③〔東叡山寛永寺図〕は、有名な絵師が手がけたものではないため表現が画一的になってはいますが、桜や松などの樹木や建物、池などに淡彩をほどこした上に建物名を記し、丁寧な仕上がりになっています。ところどころに貼紙があるのは、情報の上書きがあるためでしょう。江戸時代の各大名は将軍家霊廟の墓参が義務付けられており、その



③〔東叡山寛永寺図〕



④ 東叡山円頓院寛永寺 上野

支度を江戸の宿坊兼菩提寺である各子院（塔頭）において行いました。例えば「明王院松平薩摩守殿」とあるのは、明王院（現存せず）が菩提寺の薩摩藩主・島津斉彬を指すと考えられます。このように寛永寺子院と大名の名前（官職名）が記されているのは、大名が代替わりすることに官職名も変わり、火災などで子院の位置も移動する場合もあったため、これらの情報を把握する目的で制作されたと考えられます。

④「東叡山円頓院寛永寺 上野」は、③と比べると絵図の表現は簡易的ながら、周囲に配された文字情報はさらに饒舌です。将軍やその家族の命日と別当寺院名、そして「諸侯方宿坊附」として寺院と大名の名前が列挙され、複数の大名が同じ寺院を使っていたことがわかります。本絵図の画面右上には「天保十四年閏九月」との記載があるので、天保14年（1843）以降の制作とわかります。

◆三枚続きの浮世絵 19世紀以降、浮世絵の定型は、約39×27cmの大判と呼ばれるサイズです。幕末から明治時代にかけて、この大判を横に3枚並べて一組の揃い物に仕立てる三枚続きという様式の浮世絵が次第に増えて制作されました。この様式は、大判1枚では描き切れない構図を可能にしたため、風景画や物語絵に盛んに用いられました。対象を縮小せずに広い空間を描けるため、迫力ある作品がいくつも生まれました。①②のように境内や博覧会会場など広い空間を描くための格好の技法として、積極的に選ばれました。

慶応3年（1867）7月、豊原国周画「江戸八景の内 不忍の暮雪」(⑤)は、不忍池の雪景色をテーマにした風景画でありながら、借景にすることで人物を小さくすることなく描いています。手あぶりや食器など細々とした描写は、冬の宴会風景を実感ある場面に仕立てています。浮世絵には、八景、つまり8つの景色をテーマとしているものがあり、これは中国の伝統的な画題「瀟湘八景」にならない発展したものです。近江八景や金沢八景などが有名ですが、江戸八景もあり、当館所蔵資料では、溪斎英泉「江戸八景 吉原の夜雨」があります。落雁、帰帆、晴嵐、暮雪、秋月、夜雨、晚鐘、夕照という、8つの時刻と天候を限定した場面と地域を組み合わせた記録が多く見られます。浅草八景や隅田川八景のシリーズもあり、江戸八景は「ここ」と万人が認める地域は見られませんでした。景勝地として知られた地域を「八景」として銘打ち、宣伝する動きは活発にあったようです。

以上ご紹介した①～⑤を含め、約25点の作品を展示する企画展は、令和8年12月1日（火）から翌9年（2027）3月14日（日）まで開催します（会期中展示替えあり）。中央図書館リニューアル後最初の展覧会です。新しくなった展示空間とともに、美しい浮世絵や絵図の世界をお楽しみください。



⑤ 江戸八景の内 不忍の暮雪

これまでの企画展をふりかえって

郷土・資料調査室の展示コーナーは、平成21年(2009)6月にリニューアルを行い、以来年4回の展示を計64回行ってまいりました。来たる令和8年(2026)12月には、さらなるリニューアルを行い、展示ケースを増やして充実をはかる予定です。これを機に、以下では16年にわたる展示をふりかえっていきます。

◆**リニューアル** リニューアル直後は、以前から開催していた地域別のパネル展示の延長で、最後の地域「根岸」をとりあげました(「根岸～移り変わるイメージ～」)。リニューアルによる変更は、複数の展示ケースを導入したことです。これ以降、パネルだけではなく、実際の資料をケースに入れて展示し、テーマ性の高い展示を開催してきました。最初の企画展は、「台東の園芸文化200年」として、江戸・明治・大正・昭和における園芸文化と台東区の関わりを示しました。江戸の変化朝顔から昭和初期の小学校における屋上庭園まで、人と植物の歴史を地域の視点から明らかにしました。

◆**高相嘉男写真展** 次いで、平成20年(2008)に台東区に譲渡された、浅草出身の写真家・高相嘉男氏の写真メインの企画展を同22年から26年まで合計4回開催しました。現在は改装された浅草寺の石畳、運行を取りやめた2階建てバスなど、なつかしい台東区の風景写真をパネルで展示しました。また、宣伝用として、通常のA4サイズのチラシではなく、ハガキサイズを印刷して配布し、PRにつとめました。



▲リニューアル後の展示コーナー(2009年6月撮影)

◆トーク・イベント、スライド・トーク、ギャラリー・トーク

展示の内容が多岐にわたるにしたがって、その内容に沿った関連イベントを新たに行うようになりました。平成25年からは、複数の講師による講演会や、ブック・トークなどを組み合わせたトーク・イベント、展示内容をより深く理解していただけるスライド・トークを開始しました。

さらに、展示コーナーにおいて、展示品を前に30分程度の解説を行うギャラリー・トークを、平成28年「郷土・資料調査室ってどんなところ?」展から開始し、以後毎回、展示期間中に行っています。

◆**日記シリーズ** 毎回さまざまなテーマのもと企画展を行っていますが、高相写真展同様にシリーズ物の一つ定めることになり、「日記」をテーマに展示を構築することとなりました。「日記が語る台東区」を冠し、浅草寺の公用日記『浅草寺日記』、大和郡山藩主・柳沢信鴻のぶとぎの引退後の日記『宴遊日記』、佐渡出身の洋学者の学ぶ環境を明らかにした『柴田収蔵日記』、『樋口一葉日記』、江戸の噂話を事細かく記録した『藤岡屋日記』、旅日記、外国人の日記、『馬琴日記』、狂歌師・大田南畝の『花見の日記』をとりあげ、合計10回開催しました。

馬琴日記は、視点を変えて2回開催しました。2回目は、令和4年(2022)が台東区ゆかりの人物、饗庭篁村あへぼこうそんの没後100年に当たるため、馬琴日記を現代の世に伝えた人物として焦点を当て、森鷗外おうがいや幸田露伴ろはんなど明治の文学者の視点から見た、饗庭篁村の編んだ馬琴日記の抄録『馬琴日記抄』をひもときました。

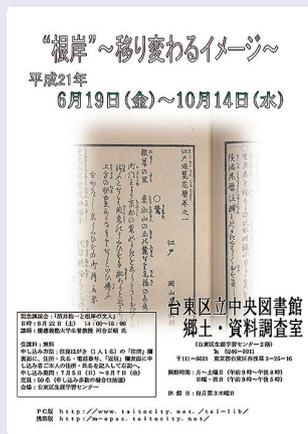
当館は江戸や明治時代の実物の日記の所蔵はなく、すでに活字化されている図書資料から台東区について記さ



▲No. 13



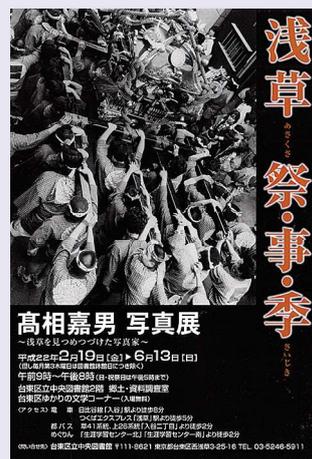
▲No. 21



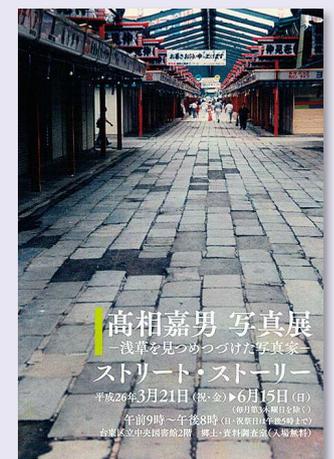
▲No. 1



▲No. 2



▲No. 4・5



▲No. 21

れた部分を取り出し、パネルとして展示しました。そしてかたわらに、日記に関係した浮世絵や和本などの実物資料を展示することで、より掘り下げた情報を示しました。博物館や美術館と異なり「日記を読んでほしい」ため、パネルの文字量が多くなってしまいましたが、展示をきっかけに日記そのものに関心を持たれた方もいらっしゃるようです。

◆**台東区ゆかりの文学者** 郷土・資料調査室では、台東区に生まれ、または台東区に住んで執筆活動をしていたゆかりの深い作家の作品や、台東区を舞台とした近現代の文学作品を収集しています。これらゆかりの文学者のうち、小島政二郎・久保田万太郎・樋口一葉・大沼枕山・饗庭篁村の5名をとりあげて展示しました（一葉・篁村は日記シリーズで紹介）。小島政二郎は、生誕120年没後20年を記念し、大沼枕山は、生誕100年を記念して展示しました。また、「所蔵資料で見る谷中五重塔」では、幸田露伴の『五重塔』の表紙をブックカバーにデザインして配布しました。



▲No. 45



▲No. 50



▲No. 54 『馬琴日記抄』 (当館蔵)



▲No. 54



▲No. 23



▲No. 28



▲No. 30



▲No. 36



▲No. 38



▲No. 42

No.	展示タイトル	期間
No. 1	根岸 ～移り変わるイメージ～	2009/06/19～10/14
No. 2	台東の園芸文化 200年 前期	2009/10/16～12/16
No. 3	台東の園芸文化 200年 後期	2009/12/18～2010/02/17
No. 4	高相嘉男写真展 浅草祭・事・季 前期	2010/02/19～04/14
No. 5	高相嘉男写真展 浅草祭・事・季 後期	2010/04/16～06/13
No. 6	没後110年 円朝	2010/06/18～09/15
No. 7	ゆかり展	2010/09/17～12/15
No. 8	浅草十二階 ～凌雲閣ノスタルジア～	2010/12/19～2011/03/16
No. 9	新収蔵資料展	2011/03/18～06/15
No. 10	まつり	2011/06/17～09/14
No. 11	時の鐘 上野寛永寺の鐘と柏木家文書	2011/09/16～12/14
No. 12	谷中に眠る	2011/12/16～2012/03/14
No. 13	浅草を見つめつけた写真家 高相嘉男写真展 あの日の隅田川	2012/03/16～06/17
No. 14	博覧会 最先端大集合!	2012/06/22～09/19
No. 15	一枚の景色 絵はがきで見る台東区	2012/09/21～12/19
No. 16	新収蔵資料展	2012/12/21～2013/03/20
No. 17	復興	2013/03/23～06/16
No. 18	歌舞伎のまち、浅草猿若町 ～江戸っ子があこがれた、粋でおしゃれな芝居町～	2013/06/21～09/18
No. 19	「坂本村文書」と入谷の植木屋 ～明治期農村の都市化～	2013/09/20～12/18
No. 20	かつて浅草にあったコレクションたち。浅草文庫と台東図書館	2013/12/20～2014/03/19
No. 21	浅草を見つめつけた写真家 高相嘉男写真展 ストリート・ストーリー	2014/03/21～06/15
No. 22	『吉原細見』の世界	2014/06/20～09/17
No. 23	日記が語る台東区『浅草寺日記』	2014/09/19～12/17
No. 24	『下谷生れ』の世界 ～小島政二郎の見た台東区	2014/12/19～2015/03/18
No. 25	百貨店の時代～昭和初期の上野松坂屋	2015/03/20～06/14
No. 26	谷中の自然を見る 本草学者・岩崎灌園の世界	2015/06/19～09/16
No. 27	のりものいろいろ ～新聞記事から見る台東区～	2015/09/18～12/16
No. 28	日記が語る台東区2 お殿様の上野浅草散歩道『宴遊日記』	2015/12/18～2016/03/16
No. 29	所蔵資料で見る谷中五重塔	2016/03/18～06/12
No. 30	日記が語る台東区3 蘭学者がつづる江戸～柴田収蔵日記～	2016/06/17～09/14
No. 31	郷土・資料調査室ってどんなところ?	2016/09/16～12/14
No. 32	所蔵資料から見るさまざまな門	2016/12/16～2017/03/15



▲No. 58



▲No. 24 「下谷生れ」
(当館蔵)



▲No. 33

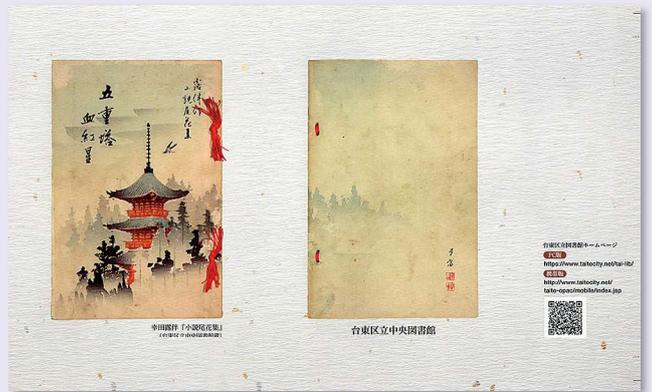


▲No. 40

◆吉原細見の世界 シリーズ化した展示の一つに「吉原細見の世界」があります。このシリーズは、江戸吉原の遊郭の遊女屋（妓楼）、遊女名などを細かく記して毎年発行した案内用の冊子である『吉原細見』をメインに据えた展示です。

第1回目は、細見の口絵にあたる「五十問道」の道筋が今と変わらない点、区内に墓碑がある平賀源内や阿部櫛斎などの本草学者が余業として本名でなくペンネームで序文を書いていた点、妓楼楼主の功績を刻んだ石碑など、現在の台東区と縁深い史跡などの視点から細見をひもときました。

また、下町風俗資料館（現、したまちミュージアム）が所有している江戸時代の吉原の妓楼を復元した「江戸風俗人形」の模型の躯体部分を製作した檜細工師・三浦宏さんを講師のお一人にお迎えして、製作当時（昭和55年・1980頃）のこだわりなど、貴重なお話をいただいたトーク・イベントを開催しました（下町風俗資料館でも同時期に模型を展示）。



▲幸田露伴『五重塔』をデザインしたブックカバー
(2016年3月作成)

No.	展示タイトル	期間
No. 33	久保田万太郎と台東区	2017/03/17～06/11
No. 34	台東区発足70周年記念企画展 台東区博物館ことはじめ	2017/06/16～09/20
No. 35	台東区発足70周年記念企画展 定点写真と台東区の風景～名所の記憶をさぐる～	2017/09/22～12/20
No. 36	日記が語る台東区4 樋口一葉日記	2017/12/22～2018/03/14
No. 37	郷土・資料調査室ってどんなところ？II	2018/03/16～06/17
No. 38	日記が語る台東区5 藤岡屋日記の世界 安政江戸大地震と幕末の台東区	2018/06/22～09/16
No. 39	台東区の縁日 一朝顔市・酉の市・歳の市	2018/09/21～12/16
No. 40	幕末・明治の漢詩人 大沼枕山	2018/12/21～2019/03/17
No. 41	郷土・資料調査室ってどんなところ？III ～のりもの編～	2019/03/23～06/16
No. 42	日記が語る台東区6 江戸の旅日記を読む	2019/06/21～09/16
No. 43	浅草仲見世	2019/09/20～12/15
No. 44	吉原細見の世界II	2019/12/20～2020/02/27
No. 45	日記が語る台東区7 外国人が見た台東区	2020/06/19～09/13
No. 46	台東区の大名屋敷と大名庭園	2020/12/18～2021/01/07 2021/06/18～09/12
No. 47	上野公園～近代の歩み～	2020/09/18～12/13
No. 48	一枚の景色2 絵はがきでたどる明治・大正・昭和	2021/03/19～04/24 2021/06/01～06/24
No. 49	絵本江戸土産～広重が描いた台東区～	2021/09/17～12/12
No. 50	日記が語る台東区8 馬琴日記	2021/12/27～2022/03/13
No. 51	塔	2022/03/18～06/12
No. 52	台東区の古代・中世	2022/06/17～09/11
No. 53	台東区の寺	2022/09/16～12/11
No. 54	日記が語る台東区9 饗庭篁村と馬琴日記	2022/12/16～2023/03/12
No. 55	貴重資料から見る台東区之道	2023/03/17～06/11
No. 56	関東大震災100年事業 関東大震災と復興 一台東区の大正・昭和一	2023/06/16～09/18
No. 57	台東区の橋	2023/09/22～12/17
No. 58	日記が語る台東区10 花見の日記	2023/12/22～2024/03/17
No. 59	地図でたどる台東区の変遷	2024/03/22～06/16
No. 60	吉原細見の世界III 前編	2024/06/21～09/16
No. 61	台東区の池と堀	2024/09/20～12/15
No. 62	吉原細見の世界III 後編	2024/12/20～2025/02/16
No. 63	地誌の見方・調べ方	2025/02/21～06/15
No. 64	収蔵品展 一台東区の地域資料一	2025/06/20～08/31



▲No. 22



▲No. 44



▲No. 60



▲No. 62

第2回目は、妓楼の名の判じ絵、遊女が詠んだ和歌を併記した浮世絵などから、細見本文と絵画資料を比較し、妓楼と遊女の変遷に焦点を当てました。

第3回目は、大河ドラマ「べらぼう」の放送が決定したのを機に、前編と後編に分けて企画展を開催しました。前編では、歴代の葛屋重三郎が手がけた細見を並べ、初代から4代目までの事績を追いました。4代目は、細見ではなく遊女の事績を記した浮世絵の詞書の作者として紹介しました。

後編では平賀源内の序文で初代葛屋重三郎が手がけた『細見嗚呼お江戸』や、葛屋の育ての親、駿河屋市兵衛が思い出して大田南畝が書きとどめた『吉原細見天の浮橋』など、源内が手がけた細見の序文を展示しました。「細見の実物を見たのは初めて」という声もあり、好評を博しました。そのほか十返舎一九の『金草鞋 初編』に登場する「べらぼう」の語に注目し、朋誠堂喜三二など、葛屋と親交を持った人物の作品を展示しました。

いずれも『吉原細見』を地域資料ととらえて、歴史的文化的な背景とともに展示しています。企画展「吉原細見の世界」シリーズは、およそ5年に1回のペースで開催しています。次回展示は令和10年頃を予定しています。

◆記念展示 台東区ゆかりの人物の没後100年など人物の周年記念のほかに、施設の新規開設や歴史的な事柄の周年を記念した企画展も開催しました。

「浅草文庫と台東図書館」は、郷土・資料調査室「浅草文庫コーナー」の新設(平成24年11月)から1年を記念したもので、複数の浅草文庫の歴史を紹介し、あわせて

中央図書館の前身に当たる台東図書館の様子を展示しました。同じく中央図書館谷中分室の新設(平成27年4月)から1年目の記念展示「本草学者・岩崎灌園の世界」は、谷中に住んだ学者の書物から江戸以来の緑豊かな谷中の自然の姿を紹介しました。

平成29年、郷土・資料調査室では「台東区発足70周年記念企画展」と銘打って、「台東区博物館ことはじめ」と「定点写真と台東区の風景」を開催しました。前者は、東京国立博物館創立前後の浮世絵などの絵画資料と、区立博物館の開館当時と現在の写真により、その移り変わりを示しました。後者は、図書館の事業として昭和49年(1974)以来続けている定点写真を軸に、江戸・明治・昭和の風景の変遷を示しました。

また別に、台東区区政発足70周年記念事業として「定点写真によるパネル展」も開催しました。これは、巡回展示として浅草公会堂→台東区生涯学習センター1階→浅草文化観光センター→台東区役所1階を会場にし、定点風景を印刷したしおりも配布しました。来たる令和9年は80周年に当たるため、「台東区の80年(仮)」として企画展を開催する予定です。

周年記念展示として他の複数の自治体でも実施された「関東大震災100年事業」は、当館では「関東大震災と復興」として、大正12年(1923)に起きた関東大震災の復興の歴史を石版画や地図で解説しました。

以上、展示コーナーでは、貴重資料を中心に展示してきました。今後もさまざまな視点から、地域の歴史や文化をとりあげていく予定です。



▲No.20



▲No.26



▲定点写真によるパネル展
浅草公会堂の展示風景 (2017年10月撮影)



▲No.35



▲No.34



▲No.56

令和7年度の企画展

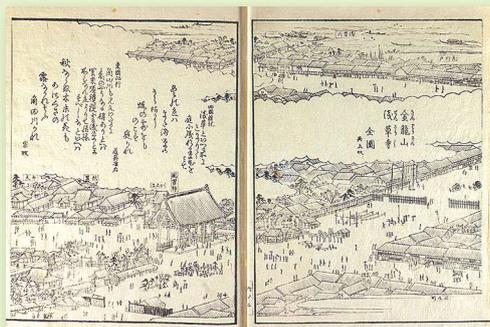
地誌の見方・調べ方

令和7年(2025)2月21日(金)～6月15日(日)

地誌とは、ある地域の自然・社会・文化などの地理的現象を記述してその地域の特色を示したものをいいます。

本企画展では、江戸時代の地誌に注目して展示し、18世紀に成立した『江戸砂子』や『江戸名所図会』をとり上げ、歴史学・書誌学の視点から読み解き、各地誌の特徴や違いを見ていきました。

あわせて、19世紀の歌川広重による『絵本江戸土産』などの名所図や幕末期に刊行されたさまざまな地誌をご紹介します。



▲江戸名所図会

- ◆講演会 ①「江戸名所図会の世界」 3月2日(日) 齊藤智美(文京ふるさと歴史館専門員)
- ②「地誌の見方・調べ方」 5月29日(木) 平野 恵(当館郷土・資料調査室専門員)
- ◆図書館員によるギャラリー・トーク 4月23日(水)・6月1日(日)



▲展示風景

収蔵品展 —台東区の地域資料—

6月20日(金)～8月31日(日) ※最終日は正午まで

本企画展では、郷土・資料調査室が所蔵する台東区の地域資料に焦点を当てました。佃煮などの江戸のたべもの、紙漉きや千代紙などの江戸のものづくり、さまざまなタウン誌、浮世絵などの貴重資料を紹介しました。

- ◆ギャラリー・トーク 7月30日(水)

令和8年度の予定

浮世絵でたどる上野公園の歴史 —寛永寺と内国勧業博覧会—

令和8年(2026)12月1日(火)～令和9年(2027)3月14日(日)

生涯学習センター改修工事にとまない、郷土・資料調査室の一角の展示コーナーを一新しました。新しくなった展示空間を最初に彩るのは、華やかな浮世絵です。

本企画展では、江戸時代の寛永寺境内の浮世絵・絵図を展示します。創立から400年を数える寛永寺は、庶民の花見スポットとして賑わう姿が浮世絵に多く描かれました。また、第1・2・3回の内国勧業博覧会の会場として使用された点にも注目し、150年以上の歴史を刻む上野公園の姿も紹介します。

- ギャラリー・トーク、講演会開催



▲上野東叡山花盛図

台東区の80年(仮)

3月19日(金)～6月13日(日)

- ギャラリー・トーク

台東区立中央図書館 郷土・資料調査室

〒111-8621

東京都台東区西浅草3-25-16

TEL. 03-5246-5911

<https://www.city.taito.lg.jp/library/index.html>



【開館時間】

月～土曜日 午前9時～午後8時
日曜・祝日 午前9時～午後5時

【アクセス】

- つくばエクスプレス「浅草」駅 A2出口から徒歩8分
- 地下鉄日比谷線「入谷」駅 徒歩8分
- 北めぐりん・南めぐりん「生涯学習センター北」徒歩3分
「生涯学習センター南」徒歩3分
- 都バス「入谷二丁目」停留所 徒歩3分

